

- 神 楽 名 ^{よかりうち} 夜狩内神楽
- 伝 承 地 夜狩内地区
椎葉村大字下福良夜狩内
- 指 定 等 国指定重要無形民俗文化財
- 伝承団体 夜狩内神楽保存会
代表 那須正己



弓の正護

□神楽の概要・由来・その他

^{よかりうち}夜狩内神楽は、氏神さまである天満天神と森鹿倉神社に、五穀豊穰と無病息災を願い奉納される。各神社の御神木には注連がかけられ、御神酒を入れた竹筒の「かけぐり」や米粉と麴を水で練ったものを榊葉にのせた「ごふ」等が供えられる。笹竹に集落の人数分の白紙の紙垂れを吊した「人物の弊」も添えられる。それぞれの神社では、神事の後に神迎えの神楽として「座付」等が舞われ、「神迎えの弊」に神を勧請する。神楽宿である夜狩内集会センターの^{たかまがはら}高天原に「神迎えの弊」を納め、神々を迎えての神楽が明け方近くまで奉納される。

舞処である^{みこうや}御神屋は、四隅に竹を立て四方に注連をはる。その注連には、切り下げの御幣と榊枝が交互に下げられる。天井中央には「星の幣」と呼ばれる白い御幣が、小銭、麻緒、米などと共に吊り下げられる。正面中央には祭壇の^{たかまがはら}高天原が設置され、神迎えの御幣、金の御幣、榊などが^{むらたば}藁束の上に立てられる。御神屋のそとも、五色の幣を吊した木が高く飾られ、森の中で舞っているかのように設えられる。

□芸能の機会・場所

- 夜狩内夜神楽： 12月の第3土・日曜日頃、夜狩内集会センターにて「^{ばんおこ}板起し」の後、天満天神と森鹿倉神にて1～2番奉納。その後、夜狩内集会センターにて夜神楽を奉納。
- 鈴の口^{くちあ}開け： 1月～3月の頃、新年の神楽始めの行事。「座付」「神迎え」「^{へい}弊の手」を奉納。

□演目一覧

^{ばんおこ} 板起し	^{ざつけ} 座付 (天満天神)	^{ざつけ} 座付・ ^{かみ} 上の ^{じゅう} 重 (森鹿倉神社)
神迎えの神楽・ ^{たかまがはら} 高天原	^{いちかぐら} 一神楽	^{ざつけ} 座付 ^{かみ} 上の ^{じゅう} 重
^{たすき} 褌の手の舞	^{じわり} 地割の舞	稲荷神楽
^{がんにょうぜ} 願成就	^{へいのて} 弊ノ手	しゃからほう
^{だいじんかぐら} 大尽神楽	矢の手の舞・鈴なし	温野手の舞・飛ぶとこ
		弓の正護
		神送り

*平成27年12月に奉納された演目に基づく。

□演目の特徴

「願成就」では、御神屋回りの注連縄に吊された榊葉を手に採って御神屋に入り、東・南・西・北・中央の五方を向き願成就の唱え言し、三度の拝みをする。この演目では、女性を含む参拝者も願主として御神屋に入ることが許される。来年も病気や不浄のないように祈願するもので、榊葉はお守りとして大事に持ち帰る。

「温野手の舞・飛ぶとこ」はもち米をのせた盆を両手で持つ三人舞で、激しく舞った後に散米をする。舞の途中に仮装した村人数名が、芝(榊木)を床に引きずり、御神屋に乱入する「芝入れ」がある。乱入者たちは太夫にとがめられ、ことわりを言って酒と肴を太夫に差しだし、もう御神屋を荒らさないと退く。

□その他の特徴

○面：鬼神面、等

○楽：太鼓、笛、鉦(銅拍子)

○装束：舞衣、袴、烏帽子、毛笠(竹の輪に五色の上垂れ) 等

○採り物：御幣、扇、鈴、刀、弓、矢、盆 等

○文書：「文政七年(1824) 中野八重 利平八口」の墨書のある「高天原ノ云い句」には、「高天原の唱教」をはじめ「温野荒神問答」等が記されている。

□伝承の現状・課題

夜狩内集会センターが建設される以前は、民家を神楽宿とし輪番で夜神楽を奉納していた。現在、保存会会員は40名ほどいるが、実際の舞い手は12名から13名と少ない。地域外に住んでいる人も多く、夜神楽の継承のための方法が模索されている。



神迎え



しゃからほう



温野手の舞